

松 本 好 雄 著

## 「コンテナの輸送実務」

松 岡 英 郎  
(原田港湾作業・株)

### はじめに

1967年9月20日、午後4時、米国 マトソン社のコンテナ船「ハワイアン・プランター号」は、東京港を出航し一路米国に向かった。日本—米国を結ぶコンテナ輸送の第1船である。極めて短い期間ではあったが、わが国経済界は「第2の黒船」と呼ばれたコンテナリゼーションに巻き込まれ、経済新聞にコンテナに関連する記事が掲載されない日はなかったといわれるほどであった。

以来、マトソン社のコンテナ船は日・米両国間にピストン・サービスを繰り返し、米国に先行を許したものの、わが国商船グループの就航も間近に迫っている。

コンテナリゼーションに関する議論は、好むと好まざるにかかわらず本質論から実施を前提とした技術的に移らなければならない。本格的なコンテナ輸送の開始は、よく多くの人にコンテナに対する知識——とくに実 際 的 な 取 扱 に関する知識を要求することとなる。

このような時に、わが国における数少ないコンテナ輸送のパイオニアの一人である松本氏の手によって「コンテナの輸送実務」が出版されたことは、極めてタイムリーであり、かつ意義のあることといえよう。

以下、本書の内容を簡単に紹介してみたい。

### 本書の構成

- 1 コンテナ輸送と貿易
- 2 米国の対日貿易におけるコンテナ貨物
- 3 コンテナ貨物の港湾における取扱料金
- 4 海上運賃同盟に規定されているコンテナ・ルール
- 5 米国内の陸上輸送
- 6 一貫通し輸送経費の把握とその実例
- 7 コンテナ輸送への関連諸問題

## 8 航空コンテナ

となっており、付録として①日本におけるコンテナ輸送発展のあしあと②日本・米  
国中西部のコンテナ輸送に関する輸送実験報告書③コンテナ用語の新語・略語が掲載  
されているほか、51に達する表、40もの図表が収録され、読者の利便に供している。

本書の目的は、タイトルの示すように、コンテナ輸送の実際を周知させるためのも  
のではあるが、付録には簡単ではあるが、わが国におけるコンテナ輸送の歴史を紹介  
するなど、行き届いた筆者の配慮に敬意を表したい。

本書はそのタイトルからみても、実務の指針たるべきものであり、したがって、その  
声価は第3章～第7章において認識さるべきであろう。すなわち、第1章においては  
わが国の経済構造が貿易依存型経済であると同時に、国際競争は貿易自由化の進展な  
どを原因としてますます激化しつつある。この国際商戦を勝ちぬくためには、輸出価  
格の位下を図らなければならず、この点からコンテナ輸送がクローズ・アップされて  
きたのは周知の事実であろう。

第3章において筆者は空コンテナと港湾運送業界のコンテナに対する姿勢を指摘し  
ている。前者については、米国からわが国に送られるコンテナの80%が空であるにも  
かかわらず、それに要する経費が過大であり、荷主と海運業者にとって大きなマイナ  
スとなる一方、港湾運送事業者にとっては当面はかなりのメリットを生んでいると指  
摘している。

また沿岸料金については「空ビン、塩0カマス入）、コルク、石綿、綿花、羊毛類  
は最低1トンにつき3～50円とコンテナに詰めた場合の方が高くなる。これらの貨物  
は、コンテナに詰めてユニット化した場合、荷役の迅速化がはかられ、短時間で大量の  
貨物を取扱うことができるが、料金の高くなることを荷主がするわけがない。すなわ  
ち、港湾運送業界はコンテナ輸送に対して前向きの姿勢をとっていない……」と断定  
するが、この点については、すべての港湾運送事業者が、果たして近視眼的な視野し  
かもっていないのかどうか、筆者の見解にはにわかに肯定することはできない。

第4章は、海上運賃同盟におけるコンテナ・ルールである。筆者のコンテナに対す  
る造詣の深さを物語るものであり、付表の「海上運賃同盟コンテナ・ルール一覧表」  
は利用者にとって貴重な資料となりえよう。

筆者は「日本中心とする同盟コンテナ・ルールは、海運会社の便宜による貨物のコ  
ンテナ詰めを禁止しているが、これはコンテナ輸送の本質を理解した者にとっては誠

に矛盾している」と指摘し、もっとも注目すべきものとして、北大西洋大陸運賃同盟(1966年3月16日以降発効)を紹介している。このルールは”在来のコンテナ・ルールの持っていたコンテナ輸送の発展を阻止する要素を全部取り除いた”ところに特徴があるとされている。コンテナ輸送のメリットを享受するには、新しい輸送体系にマッチするルールを設定しなければいうまでもないが、いかにコンテナ輸送が脚光を浴びているとはいえ、なお世界海運は在来船が支配している。したがって同盟ルールは在来船のメリットを第一義として考えざるをえない。将来の飛躍を約束されているマトソン、シーランドといったコンテナ会社にしても世界各国に張りめぐらされた既在の勢力の前にはやはり屈せざるをえないのであろう。しかし、コンテナリゼーションの展開とともにネックはますます露呈し、大幅な改正を余儀なくされるであろうことは自明である。

第5章は、米国内のコンテナ陸上輸送について詳述してある。内容は、運賃率、運送経路、貨物取扱業者、米国のトラック輸送など11項目にわたっている。コンテナ輸送には幾つかの大きなメリットがあげられているが、コストの低減は利用者にとってもっとも大きな魅力であることはいうまでもない。米国における価格構造は複雑で、商品は約3万のカテゴリーに分類され、一つの地点から5万に及ぶ米国内の輸送対象があるとされている。また、40兆のサービス価格があると推測され、これに精通するには長い経験と努力が必要である。本項には、各種の運賃率運賃率、の設定方法などについて行き届いた説明がなされ、具体的な事例も明示されているので、米国におけるコンテナの陸上輸送を理解するのに至便である。

わが国のコンテナ輸送は、開始以来1年に満たず、ほとんどが港頭で詰め、あるいは取り出される現状、でコンテナの陸上輸送は少ない。しかし、コンテナ輸送の増大とともに、陸上輸送も次第に繁忙となろう。と同時に種々の問題が提起されてくるにちがいない。米国の陸上輸送を詳説した本書はそれに対処するためにも理解しておかなければなるまい。

第6章は「本書の最も重要な部分を占めるテーマ」と筆者が述べているように、一貫通し輸送経費の把握はコンテナ輸送にかかせない重要な問題である。これを把握することによって、効率的、経済的な輸送を行なうことができるからである。これについて筆者は(1)海上運賃同盟のコンテナ・ルールに精通すること(2)輸出国および輸入国の国内輸送のコンテナ輸送に関係あるルールを熟知すること(3)輸出国および輸入国の

関税法規（とくにコンテナ貨物）を明確に把握すること——を基本的な要件としている。

本章には、各社コンテナ一覧表が掲載されているが、コンテナ輸送が軌道に乗るにつれてその種類も複雑多岐にわたってきており、輸送実務担当者はその把握に頭を痛めているといわれている。詳細を極めたこの一覧表は重用されるにちがいないまい。また「日本からの輸出貨物の実例」として、TVカメラ、テープ〔レコーダー・モーター・サイクルなどを紹介し、「外国におけるコンテナ輸送の実例」として自動車・ヨーへの出品、シカゴへのパイナップル輸送、なま菓子の輸送などについてふれている。このように豊富な事例の引用は、コンテナ輸送の実際を理解するのに極めて有益で、本書の大きな魅力となっている。

第7章はテーマのとおり、コンテナ輸送に関する諸問題のうち、コンテナの税関手続、コンテナ・リース、コンテナの規格と材質、コンテナ輸送と保険をとりあげている。

通関手続は、貿易量の増大、国際競争の激化などを背景に、簡素化、迅速化が図られていたが、1昨年採用された申告納税制度はその効果をさらに高め、“輸出即時、輸入即日”の実現も近いものとみられる。コンテナ輸送の通関手続もこの恩恵に浴しているが、通達によって特別に配慮されている面もある。一般に通関手続は煩雑かつ難解なものとされているが、効率的なコンテナ輸送を実施するうえにおいて、税関手続をマスターすることは絶対必要であろう。

また、コンテナ・リースとコンテナの規格と材質、保険も本章に掲載されている。わが国においてもコンテナ輸送の増加とともにリース企業も脚光を浴びようし、海上保険も種々の問題を提起してくるものと思われる。規格、材質の項とともに知っておかなければならない。

第8章は航空コンテナについて、その発展のあしどりについて、ふれているが海陸空を一貫したコンテナ輸送の実現のそう遠いことではないと筆者はみている。

## ま と め

わが国におけるコンテナの歴史は、すでに10年をこえるといわれる。その根源は米軍の引越荷物であった。したがって、本当の意品のコンテナ輸送はマトソン社の日・米間の就航をもってその嚆矢とみてよい。しかし、対象貨物はわが国の全貿易量から

みればまことに微々たるものである。欧米に先を越された日本商船隊も一部ではコンテナ船の進水のみ、1968 年中にはいよいよサービスを開始するといわれる。いままでどちらかといえば、日和見であったわが国産業界も、邦船グループのコンテナ輸送開始によって、積極的コンテナ化に踏み切ることになる。しかし、リハーサルの間が少ないままスタートしたわが国のコンテナ輸送は、たとえ、税関手続きなどがそれにマッチする応急体制を行なっているとはいえ、多くの問題点を内蔵しているといえる。すなわち、現在までは、まだまだテスト的な感じが多く、コンテナ輸送の終局的な目標というべきドア・ツードアはまったくといってよいほど行なわれていないために、技術的な問題はもとより、本質的な問題のいくつかもまだ解決されていないのである。当然これらの問題は近い将来、解決せねばならないが、そのためには利用者の多くが、コンテナ輸送を実際に理解していなければならない。とはいうものの現実のコンテナ輸送は一部の業界が、わずかな量を行なっているにすぎず、また、実際の勉強をしようにも、それにふさわしいテキストもなかったのである。本書はそのような要望に応えているものといえよう。もちろん、本書においても、コンテナ輸送のすべてがいつくされているとはいえない。コンテナ輸送が現在極めて流動的である現在、すべてを求めるのは困難である。しかし、現段階の実務を勉強するにはほどよくコンプリートされた実務書として、その価値は高く、筆者の努力は高く、評価されてよからう。

(A 5 版 240 頁)  
(定 価 950 円)  
(昭和43年5月18日発行)  
(発行所(株)成山堂書店)